

## 山側の交流拠点・塩江

讃岐(香川県)と阿波(徳島県)は、東西に横たわる讃岐山脈で分断されていますが、これを越えて、古くから交流が盛んでした。「讃岐男に阿波女」という言い方もそんな中から生まれたものでしょうし、江戸時代後期から戦前にかけて「借耕牛(かりこうし)」という、農繁期の間、阿波から讃岐に牛を借り入れる独特の風習が盛んに行われていました。その主要ルートだったのが、上西(かみにし)の相栗峠(あいぐりとうげ)や現在の国道193号であり、塩江町内の岩部橋付近は多くの牛で賑わい、飲食店や宿屋が繁盛したそうです。

そして現代の交流拠点「道の駅」。鉄路に駅があるのだから、道路に駅があってもおかしくないだろう。そんな発想で始まったのでしょう。その数、今や全国で1180箇所。香川県内に18箇所、高松市内には3箇所あります。そのうちの一つが道の駅「しおのえ」です。この道の駅「しおのえ」を中心としたエリアにおいて、この度、各種施設を再編集約化して新たに整備を行うことといたしました。物販や飲食、温浴、観光情報発信等の複合的な機能をもつ観光関連施設と新しい医療施設の一体的な整備を行うために、「高松市塩江道の駅エリア整備基本計画(案)」を作成したところです。

塩江町においては、県下最大規模となる栴川(かばがわ)ダムが来年夏に完成します。観光面では、昨年2月、隣の徳島県美馬市長とトップ会談を行い、塩江を拠点にして周遊できる観光ルートをつくり、連携して山側に観光客を誘導しようと申し合わせを行いました。全国的にもユニークな現代サーカスの集団「瀬戸内サーカスファクトリー」の拠点も形を見せつつあります。また、地域おこし協力隊のOBが「トピカ」という団体を作り、まちおこし活動を始めています。旧塩江小学校跡では、日本の職人文化やものづくり文化を担う職人技能者を育成する「職人育成塾」が既に4年の実績を積んで成果を挙げています。

過疎化など厳しい環境下の塩江町ですが、約1300年の歴史を持つ温泉郷は、四国で二つしかない国民保養温泉地でもあり、高松の山側の交流拠点として、その未来は明るいものと確信しています。

